

ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著
『ポルトガル人の状況に関するジハード
戦士の贈り物』 訳注（5）

谷 口 淳 一

第4章 フランクのマラバルへの到来と彼らの醜悪な行為の一部（承前）

[44 (168)]

第2節 フランクの醜悪な行為の一部に対する指摘

それは以下の通りである。マラバルのムスリムたちは、かつて安楽で快適な生活を送っていた。それは、支配者たちが圧政を行うことが少なく、古くからの慣習に留意し、ムスリムに友好的であったためである。ところが、ムスリムは、その安楽に満足せず、罪を犯して〔シャリーアに〕背いた。それゆえ、神はキリスト教徒のフランクの一種であるポルトガル人——至高なる神が彼らを見捨てんことを——を罰としてマラバルのムスリムに差し向けた。フランクはムスリムに対して圧政で臨み、害悪を与え、以下のような無数の忌まわしく醜悪な行為に及んだ。

ムスリムを殴ること。侮辱すること。通りがかった¹⁾ときに見下して嘲笑すること。泥と水がある場所で彼らを乗物にすること。彼らの顔や身体に唾を吐きかけること。彼らの出航、とくに巡礼の旅を妨害すること。彼らの財貨を略奪すること。彼らの国 (bilād) やモスクを焼き払うこと。彼らの船を奪うこと。[45 (167)] クルアーンやその他の本 (al-maṣāḥif wa al-kutub) を足で踏みにじり、火で焼くこと。モスクの聖域を侵すこと。背教の言葉を受け入れ十字架に向かって跪拝するようムス

*本稿は『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』第4章第2節～第4節 [Tuhfa/L: 44–55] の日本語訳注である。原典と著者、訳注作成の方針などについては、「ジハード戦士の贈り物（1）」および「谷口2012」を参照されたい。

1) 通りがかった (marrū) : Tuhfa/L では amarū (命じた) となっているが、3写本 [A: f. 15a; B: f. 132a; C: p. 43] に従って読む。

リムを煽り、そのために彼らに対して財貨を提示すること。ムスリムの〔妻や娘である〕女たちを誘惑するために、自分たちの女性を高価な宝石や衣装で飾ること。巡礼者やその他のムスリムをさまざまな方法で痛めつけて殺害すること。神の使徒——神が彼に祝福と平安を与えんことを——を公然と侮辱すること。ムスリムを捕らえ、囚われの身となった者たちに重い枷をはめ、奴隷を売ると同じように、彼らを売るために何度も市場へ連れていくこと。その際、身代金 (‘iwad) をつり上げるために、さまざまな方法で彼らを痛めつけること。彼らを暗くて悪臭のする〔健康にとって〕危険な家屋に集めること。彼らが排便の後に水で清めるとサンダルで彼らを打つということ。彼らを炎で痛めつけること。彼らのうちの一部の者たちを売り飛ばし、別の者たちを奴隷とし、またある者たちには情け容赦なく過酷な仕事を課すこと。グジャラート、カンクン²⁾、マラバル、アラブの地 (barr al-‘Arab) の港(?)³⁾ へ準備を整えて出て行き、船を拿捕するためにそこに留まり、拿捕によって多くの財貨と多数の捕虜を獲得すること。何と多くの高貴な生まれの女性を彼らは捕らえ妾としたことか。その結果、神の宗教の敵でムスリムに危害を与えることになるキリスト教徒の子供を彼女たちに産ませたのである。また何と多くの [46 (170⁴⁾)] サイド (sādāt)、学者 (‘ulamā)、有力者 (kubarā) が、捕らえられ痛めつけられ、ついには殺害されてしまったことか。何と多くのムスリムとムスリマがキリスト教に改宗させられたことか。舌が語ることに倦み、あからさまに話すことを蔑むような、この種の悪行や醜行が何と多くあることか。神が比類無き力を持ち権能者としてフランクをおし止めんことを。そして、昔も今も、彼らの最重要の目的で最大の野心は、ムスリムたちの宗教を変え彼らをキリスト教に引き込むことである。そのようなことにならぬよう、我々は神に加護を求める。

フランクのムスリムとの和平 (sulh) は、ムスリムと通交する必要の

2) Kankun (Canacona). ゴアの南方約30kmに位置する港市。

3) m-n-t-h. この綴りに相当する語としては、辞書には「毛穴」を意味する mantah の複数形しか見当たらない。Lopesはcostas, Nainarはportsと訳しているが、いずれも根拠は示されていない [Tuḥfa_trans/L: 45; Tuḥfa_trans/NI: 61]。本稿ではひとまず Nainar の訳に従っておく。

4) この頁は本来166頁となるべきであるが、PDF版では乱丁のため170頁となっている。

ために過ぎない。というのも、海岸地帯にある港市の住民の大半がムスリムなのであるから。それゆえ、ある航海期 (mawāsim) にポルトガルから新しく到来したフランクたちは、コーチン⁵⁾でムスリムと彼らの様子を見ると、「今に至るまでムスリムたちの様子は変化しなかった」と言って、ムスリムを彼らの宗教から転向させなかった点について、〔インドにおける〕フランクの長 (kabīr) を非難した。「彼らは口で神の光を〔吹き〕消そうとしているが、たとえ不信仰者たちが嫌おうとも、神はその光を完成することを決意しているのである」⁶⁾。

それゆえ、フランクの長は、コーチンの支配者に「ムスリムたちをコーチンから追放しなさい。彼らから得られる利益は少ない。彼らから得られる利益の何倍ものものを、あなたは我々から得られるのである」と言った。しかし、コーチンの支配者は「彼らは古い時代から我らの臣民である。彼らがいるからこそ、我らの国 (balad) の繁栄がある。彼らを追放することはできない」と答えた。フランクは、ムスリムとその宗教に対してのみ敵対し、ナーヤルやその他の不信仰者たちには敵対しないのである。〔47 (165)〕

第3節 ザモリンのフランクとの和平、カリカットにおけるフランクの城塞建設

それは、以下の通りである⁷⁾。戦争の期間が長くなり、ムスリムたちはひどく疲弊した。戦いに多額の財貨を費やしたザモリンが没し、その兄弟が即位すると、彼は、コーチンとカナノール⁸⁾の民のように、彼の臣民であるムスリムたちが商売に従事できるようにし、彼らの疲弊と貧窮をくい止めるために、フランクとの和平が利益 (maṣlahā) になると考えた。そこで、彼は彼らと和平を結び、彼の臣民が毎年4隻の船をアラブの地すなわちジッダとアデンへ送り出せるようにするという条件で、彼らがかリカットに城塞を築くことを許可した。そこで、呪われし者どもは防護を固めた城塞を築き始めた。ザモリンの臣民たちは、他の者たちのように彼らの許可証 (awrāq) を携行し、胡椒と生姜を積んでアラ

5) Kaṣī (Cochin). 「ジハード戦士の贈り物 (1)」〔94頁注20〕参照。

6) この文は、クルアーンの61章8節と9章32節を合成したものである。

7) 本節が扱う時期の諸事件については、Logan 1887 [pp. 320–322] を参照。

8) Kannanūr (Cannanore). 「ジハード戦士の贈り物 (4)」〔28頁注6〕参照。

ブの地へと4隻の船を送り出し、グジャラートなどへ商売のために航海を始めた。以上のことは、920年または921年⁹⁾のことであった。

4隻の船がカリカットへ戻り、フランクの城塞の建築が完了すると、彼らはザモリンの臣民がアラブの地へ航海することと胡椒と生姜を船へ積み込むことを禁じ、この両品目の商売を自分たちの独占とした。そして、[48 (164)] 彼らは〔自分たち以外の〕船で両品目を少しでも見つけると、船の中の財貨と人員ごとその船を拿捕した。ムスリムやその他の人々に対して、フランクによる圧政と害が及んでいたが、ザモリンは、彼らの〔さらなる〕害悪を恐れて、和平を維持し彼らの害に耐えていた。それと同時に、彼はひそかにムスリムのスルターンたちに使節を送り、フランクとの戦争の準備を促したが、何も反応はなかった。至高なる神が望まなかったからである。

フランク——神が彼らを呪わんことを——は、狡猾かつ欺瞞の民であり、自分たちの諸事の利益を心得ている。したがって、必要なときには敵に対して徹底的にへりくだるが、その必要がなくなると¹⁰⁾、あらゆる可能な手段を用いて、敵に襲いかかるのである。彼らは皆、意を一つにし、支配者から遠く離れているにもかかわらず、有力者たちの命令に背くことはなく、彼らの間で対立が生じることもまれである¹¹⁾。また、彼らのうち誰かが支配権の〔奪取の〕ために彼らの長を殺害したという話は聞いたことがない。それゆえ、彼らが少数であるにもかかわらず、マラバルやその他の支配者たちは彼らに服従するようになったのである。これとは反対に、ムスリムの軍団とアミールたちは互いに対立しており、他人にその地位から退くよう求め、その人物を殺害することさえある。

さて、呪われしフランクたちは、カリカットで足場を固め、力を得たのち、[49 (163)] ポルトガルの支配者からの立派な贈り物を贈呈するという口実を設け、彼らの城塞にある一室へザモリンを招き、彼を捕らえようと企んだ。しかし、あるフランクが合図で知らせたため、ザモリンはその企みに気付いた。そこで彼は、用を足すという口実で彼らの前

9) ユリウス暦1514年または1515年または1516年。

10) なくなる (inqadat) : *Tuhfa/L* では naqadat (破棄する) となっているが、3 写本 [B: f. 134a; C: p. 47; D: f. 15a] に従って読む。

11) まれである (qallamā) : *Tuhfa/L* では kullamā (～するときは何時でも) となっているが、B 写本 [f. 134a] および C 写本 [p. 47] に従って読む。

から退出した。その結果、ザモリンは彼らから遠ざかり、至高なる神の許しによって、彼らの奸計から逃れたのである。このことが原因で、フランクたちは上記の人物をカリカットから追い出し、彼とその関係者をカナノールへ移した。

923年1月¹²⁾、フランクは重装備を施して28隻の船でゴアから出航し、保護されジッダの港を獲得すべくそこへ向かった。彼らはその港に到来すると、ムスリムたちは慌てふためき、ひどく恐れた。そこには、アミール・サルマーン・ルーミー¹³⁾ がいて、彼の許には、200名の軍団とグラブ船¹⁴⁾ があった。後者は、ガウリー¹⁵⁾ がフランクと戦うためにマラバルへ〔派遣するために〕準備したものの、そこに放置されていたものである。

ジッダの民が陸からフランクに対して砲撃したところ、一部の船に命中した。すると、彼らは大砲を恐れて、帆を上げ射程外に¹⁶⁾ 投錨し、そののち逃げ出した。そこでアミール・サルマーンは、30名の兵士を乗せた2隻のスプーク船¹⁷⁾ を派遣して彼らの後を追わせた。一行は、12名のキリスト教徒が乗った小さなグラブ船をカマラーン¹⁸⁾ で捕らえ、彼らを連行してジッダへ到着した。呪われし者ども（逃げたフランクたち）は、インドへの季節風（al-mawsim al-Hindī）が止んだため、カマラーンにて弱り果て〔て留まっ〕た¹⁹⁾。その後、彼らは、至高なる神の許しによって、失意のうちにゴアへ戻ったのである。以上は、神の恩恵によるものである。[50 (162)]

12) ユリウス暦1517年1月または2月。

13) al-Amīr Salmān al-Rūmī. 「ジハード戦士の贈り物（4）」[40頁注60] 参照。

14) グラブ船 (gīrbān) : 「ジハード戦士の贈り物（4）」[38頁注52] 参照。

15) al-Ġawrī. マムルーク朝スルターン。在位906-922 [1501-1516] 年。「ジハード戦士の贈り物（4）」[39頁注55] 参照。

16) 射程外に (fawqa al-īlmi) : 直訳すると「〔砲台から〕判る範囲を超えて」となるか。Lopes と Nainar の訳に従った [Tuḥfa_trans/Lopes: 49; Tuḥfa_trans/NI: 64]。

17) スプーク船 (sunbūq) : 「ジハード戦士の贈り物（4）」[37頁注46] 参照。

18) Kamarān. 「ジハード戦士の贈り物（4）」[40頁注63] 参照。

19) 「フランクたちは」弱り果てた (tawahhaw) : この語は、wahā の第5形（完了3人称男性複数）と考えられる。辞書にはこの動詞の第5形はみあたらないが、第1形の意味「弱る」から意味を類推した。

第4節 ザモリンとフランクとの対立発生の原因、カリカット城の征服

以下のことを知れ²⁰⁾。カリカットにおけるフランクたちの違反や加害行為は日に日に増していったが、ザモリンはそれを黙認していた。このような事態が長く続いていたが、ついに〔9〕31年1月10日²¹⁾、カリカットにおいて、彼らとファンダライナ²²⁾の一部のムスリムたちとの間で騒乱が発生した。こうして和平は停止し、対立と戦いが生じた。

さらに、ファンダライナ、チャンマンパー²³⁾、ティルバンガド²⁴⁾、パラパナンガディ²⁵⁾等の民が複数の小さなグループ船でひそかに出港し、商売のために出港したフランクの小さな船を10隻ばかり捕獲したのであった。それは〔9〕30年²⁶⁾以前のことであった。

また、クランガノール²⁷⁾のムスリムとユダヤ教徒の間で騒乱が発生し、後者がムスリムの男を一人殺害したため、両者の間で戦闘（qitāl）が生じた。そこでムスリム側は、加勢を得て復讐を遂げるために他の地のムスリムたちに使者を送った。そして、カリカットの民とファンダライナ人、すなわちファンダライナとその周辺の村々、カッパト²⁸⁾、スイッコディ²⁹⁾の住民たち、そしてチャリヤム人（al-Šāliyātīyūn）、すなわちチャリヤム³⁰⁾、パラパナンガディ、ティルバンガド、タヌル³¹⁾、パラバンナ³²⁾、ポンナニ³³⁾、ベリアンコード³⁴⁾の住民たちが、チャリヤム・ジャーミイ（Ġāmi' Šāliyāt）に集合した。そして、ユダヤ教徒との戦い（ḥarb）の

20) 本節が扱う時期の諸事件については、Logan 1887 [pp. 323–329] を参照。

21) ユリウス暦1524年11月7日。

22) Fandarayna. 「ジハード戦士の贈り物（3）」[34頁注7] 参照。

23) Čammanpā. 「ジハード戦士の贈り物（4）」[33頁注30] 参照。

24) Tirwankād (Tiruvangad). 「ジハード戦士の贈り物（4）」[33頁注28] 参照。

25) Parpūrānkād (Parappanangadi). 「ジハード戦士の贈り物（4）」[32頁注21] 参照。

26) ユリウス暦1523年または1524年。

27) Kudungallūr (Cranganur). 「ジハード戦士の贈り物（3）」[33頁注3] 参照。

28) Kāpkāt (Kappatt). 「ジハード戦士の贈り物（4）」[32頁注24] 参照。

29) Tirkūdī (Thikkodi). 「ジハード戦士の贈り物（4）」[32頁注25] 参照。

30) Šāliyāt (Chaliyam). 「ジハード戦士の贈り物（3）」[36頁注19] 参照。

31) Tānūr (Tanur). 「ジハード戦士の贈り物（4）」[32頁注19] 参照。

32) Parwanūr (Paravanna). 「ジハード戦士の贈り物（4）」[32頁注22] 参照。

33) Fannān (Ponnani). 「ジハード戦士の贈り物（4）」[32頁注20] 参照。

34) Balīnkūt (Veliancode). 「ジハード戦士の贈り物（4）」[32頁注17] 参照。

ためにクランガノールへ向けて出撃すること、[51 (161)] ザモリンの許可と承諾を得たうえで、フランクと戦い彼らとは和平を結ばないことを合意した。以上は、[9] 31年³⁵⁾ のことであった。

これらの地の民は、100隻足らずの小さなグラブ船でクランガノールへ出撃し、多くのユダヤ教徒を殺害した。別の者たちはクランガノールの東方近郊にある村へ出撃し、ムスリムたちはユダヤ教徒の家と教会を焼き払い、さらにキリスト教徒の家と教会を焼き払い始めた。さらに、ムスリムとナーヤルの間で騒乱が発生し、幾人かのナーヤルが殺害された。その結果、その地のムスリムにとって、そこに住み続けることは不可能となり、彼らは他の地へと移ったのである。

その年、ダルマファッタン人 (al-Darmafattaniyūn)、すなわちダルマファッタン³⁶⁾、エダッカド³⁷⁾、カナノール、ティルバンガド、マヘ³⁸⁾、チャンマンパーの住民たちが、フランクと対決し戦うことで合意した。他の者たちも同様であった。

同年、さらに、コーチンの〔ムスリム〕有力者の一部、すなわちファキーフ・アフマド・マラッカール³⁹⁾、その兄弟クンジュ・アリー・マラッカール⁴⁰⁾、両者の母方のおじムハンマド・アリー・マラッカール (Muḥammad ‘Alī Marakkār) および彼らに従う者たちが、フランクと戦うことを望み、コーチンを出てカリカットへ移動した。フランク——神が彼らを呪わんことを——は、大半のムスリムとザモリンが彼らと対決することを確認すると、[52 (160)]〔艦船に〕重装備を施し、コーチンを出て上述の年⁴¹⁾の5月3日土曜⁴²⁾の朝にボンナニに上陸した。彼ら

35) ユリウス暦1524年または1525年。

36) Darmafattan. 「ジハード戦士の贈り物 (3)」[34頁注8] 参照。

37) Idakkād (Edakkad). 「ジハード戦士の贈り物 (4)」[32頁注27] 参照。

38) Mayyālī (Mahe). 「ジハード戦士の贈り物 (4)」[33頁注29] 参照。

39) Faqīh Ahmad Marakkār. マラッカール家は、ポルトガル人來航時にコーチンのムスリム社会と海上交易を事実上支配していた有力家系。1524年、ポルトガルの圧力によりコーチンを離れるが、ザモリンの影響下にあるボンナニへ拠点を移し、ザモリンに海軍力を提供した。同家は、16世紀末にポルトガルに屈服するまで、マラバルで影響力を誇った [Gabriel 1996: 78–79, 121–133]。

40) Kuṅḡ ‘Alī Marakkār. Kuṅḡ ‘Alī (Kuṅḡnāli, Kunjali) は、「小アリー」という意味で、マラッカール家の当主が名乗った称号である [Gabriel 1996: 158 (n. 382)]。

41) ヒジュラ暦931年。

42) ユリウス暦1525年2月26日。

はその家屋と店舗の大半およびいくつかのマスジドを焼き払い、川岸にあるココヤシの木の大部分を切り倒した。殉教者が出た。二日目の夜、彼らはそこを出て、ファンダライナに到来し、ファンダライナなどの民のグラブ船およそ40隻をそこから奪った。殉教者が出た。

カリカットでフランクとファンダライナの一部のムスリムとの間に騒乱が生じ、ザモリンはフランクと戦うことを決意したが、当時、ザモリンはある敵との戦争中で、遠方にて不在であった。そこで彼は、イラヤズ⁴³⁾という名の大宰相 (*wazīr kabīr*) を派遣し、フランクとの戦いを遂行させた。イラヤズはフランクとの戦いにおおいに奮闘し、多額の経費を費やした。ムスリムとザモリン配下のナーヤルたちがフランクを包囲した。神の道のためのジハードを行おうと、多くの地からムスリムたちがカリカットへ到来した。そして、ザモリン自身がカリカットへ帰着した。フランク人の許にある食糧は底を尽き、それを城塞の外から運び込む望みは断ち切られた。そこで、彼らは城塞内にあるすべてのものを船に積み込み、外にいる者からは判らない箇所の内側から城塞を破壊し、船に乗り込んで去って行った。以上の出来事は、[53 (159)] [9] 32年神聖なる1月16日⁴⁴⁾ のことであった。戦いの始めから征服までの間に、ザモリン配下のナーヤル、要員たち (*ummāl*)、ムスリムの2000人以上が殺害された。城塞の征服によって、ザモリンとムスリムに対するフランクの怒りと敵意は増し、長期にわたって続いた。

フランクに対して戦うことに合意したのち、ムスリムたちは小さなグラブ船を用意し、グジャラートやその他の地への航海に際しては、フランクの許可証を携えず、戦闘の準備を整えて、胡椒や生姜などを積んで出港した。そのうち一部は無事であったが、多くはフランクに拿捕されたり、彼らによって陸で破壊されたりした⁴⁵⁾。そこで、ダルマファタン人と彼らに従う者たちは、その年の航海期末 (*āḥir dālika al-mawsim*) にフランクと和平を結び、彼らとの和平におけるかつての慣行に則って、フランクの許可証を携えて航海することにした。他方、ザ

43) Ilayad. ザモリンの下にいたという4人の大臣のうちの一人であろう [*Tuhfa trans/N I*: 66, n. 14]。

44) ユリウス暦1525年11月2日。

45) 彼らによって陸で破壊された (*saqata fi al-barri bi-sababi-him*) : 直訳すると「彼らが原因で陸で沈没した」となる。

モリンの臣民と彼らに従う者たちは、何年間にもわたってフランクに敵対し続け、その結果、疲弊し貧窮してしまった。

〔9〕35年⁴⁶⁾頃、フランクの船が1隻、雨期 (ayyām al-maṭar) の始めにタヌル〔沖〕で沈没した。そこで、タヌルの支配者は、その乗組員を自分の許で保護した。すると、ザモリンは彼に使者を送って、船の中にいたフランク人とそこにあった財貨を引き渡すよう求めた。しかし、彼はそれにはまったく応じなかった。そして、フランクとタヌルの支配者との間に和平が成り、彼の臣民はフランクの許可証を携えて航海することになった。また両者は、ザモリンと〔その臣民の〕航海者 [54 (158)] すべてに危害を加えるとともにポンナニを破壊するために、タヌルの支配者に属するポンナニ川の北にフランクが城塞を築くことで合意した。そこでフランクは、準備を整え石材と石灰を積み込んで、このような目的をもってマルカブ船⁴⁷⁾とグラープ船でコーチンを出発し、ポンナニ〔沖〕に投錨した。すると、神の恩恵により、激しい風が吹き、ついに彼らの船はベリアンコードの南で沈没し、無事であったのは小さなグラープ船1隻だけであった。彼らのうち非常に多くの者が死亡し、彼らに従っていた者および奴隷にも溺死する者がいた。陸に上がった者は、ムスリムたちに殺害された。フランクの許に捕らえられていた多数の人々は無事で、また、ザモリンはフランクの大きな大砲を手に入れた。神は慈悲と恩恵によって、フランクとその支援者たちの希望を打ち砕いたのである。

〔9〕37または38年⁴⁸⁾、ザモリンの臣民やその他の者たちが、約30隻のグラープ船で商売のためにグジャラートへ向けて出航した。彼らの中には、アリー・イブラーヒーム・マラッカール (‘Alī Ibrāhīm Marakkār)、彼の父方の従兄弟クッティ・イブラーヒーム・マラッカール (Kutti Ibrāhīm Marakkār) などの有力者たちもいた。その船の大半はジュー

46) ユリウス暦1528年または1529年。

47) マルカブ船 (marākib) : markab (pl. marākib) は船舶一般を意味する語であり、本訳では原則として「船」と訳している。ただし、この箇所のように、グラープ船など他の種類の船と併記されている場合は、訳し分けるために「マルカブ船」と訳す。

48) ユリウス暦1530年または1531年または1532年。

ジャーリー⁴⁹⁾とスーラト⁵⁰⁾に、一部の船はバルーチ⁵¹⁾に入った。すると、フランクはグラープ船とマルカブ船で彼らを追跡し、ジュージャーリー川 (Nahr Ġūġārī) とスーラトへ入って行き、そこにあったグラープ船と大半の [55 (157)] 財貨を奪った。バルーチにあったものは無事であった。

また、この時以前に、スルターン・バハードウル・シャー・グジャラーティー⁵²⁾——神が彼の臥所を照らさんことを——がフランクに対するジハードのために用いたグラープ船の大半が彼らに奪われ、同様に、マラバル人のグラープ船の大半が彼らに奪われるということが何度も起こったのである。これらは、神の定めと遍き裁定によるものである。「我らは神に属し、神へと還りゆく」[クルアーン：2章156節]。そしてついに、ムスリムたちは疲弊し貧窮してしまったのである。

49) Ġūġārī. 不詳。訳書ではGogarim [*Tuḥfa_trans/L*: 56]、Tojaree [*Tuḥfa_trans/R*: 126]とも表記されている。Nainarの訳ではムンバイの南方約100kmにあるジャンジラ (Janjira) と推定されているが [*Tuḥfa_trans/N1*: 96; *Tuḥfa_trans/N2*: 127 (n. 18)]、グジャラートの港市というには南に寄り過ぎているように思える。

50) Sūrat. インド西部グジャラート南部のカンバト (キャンベイ) 湾に面した港市。

51) Barūġ (Broach, Bharuch). スーラトの北約50km、ナルマダ川の河口に位置する港市。

52) al-Sultān Bahādur Šāh al-Ġuzarātī. グジャラート王国 (アフマド・シャーヒー朝またはムザッファル・シャーヒー朝) 君主。在位932-943 [1526-1537] 年。

文献および略称

『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』テキスト・翻訳

〈写本〉

Ms. 2799. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 714) [ms. A (A写本)]

Ms. 2807. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 1044-V) [ms. B (B写本)]

Ms. Arabic 28. Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. (Morley 1854: no. IV) [ms. C (C写本)]

Ms. Add. 22375. British Library (British Museum旧蔵 Cureton 1846-71: no. 945) [ms. D (D写本)]

〈刊本〉

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [*Tuḥfa/L*]

Tuḥfat al-muḡāhidīn fī ba‘d aḥbār al-Purtukāliyyīn. Ed. al-Ḥakīm al-Sayyid Šams Allāh al-Qādirī. Ḥaydarābād: Maṭba‘ al-Tārīḥ, [1931]. [*Tuḥfa/Q*]

Tuḥfat al-muḡāhidīn fī aḥwāl al-Burtuḡāliyyīn. Ed. Muḥammad al-Sa‘īd al-Tārīḥī. Bayrūt: Mu‘assasat al-Wafā’, 1985. [*Tuḥfa/T*]

〈翻訳〉

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（1）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』15号、2016年：87-97頁。[ジハード戦士の贈り物（1）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（2）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』16号、2017年：33-54頁。[ジハード戦士の贈り物（2）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（3）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』17号、2018年：33-42頁。[ジハード戦士の贈り物（3）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルト

ガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（4）』『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』18号、2019年：27-46頁。〔ジハード戦士の贈り物（4）〕

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [Tuḥfa_trans/L]

Tuḥfat-al-mujāhidīn: an Historical Work in the Arabic Language. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. Madras: University of Madras, 1942. [Tuḥfa_trans/N1]

Tuḥfat al-mujāhidīn: a Historical Epic of the Sixteenth Century. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. [Eds. P. K. Koya Kutty and A. I. Vilayathullah.] Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, 2006. [Tuḥfa_trans/N2]

Toḥfut-ul-Mujahideen: an Historical Work in the Arabic Language. Trans. M. J. Rowlandson. London: Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland, 1833. [Tuḥfa_trans/R]

辞典・目録類

辛島昇ほか監修『南アジアを知る事典』新訂増補、平凡社、2002年。〔南アジアを知る事典〕

Cureton, William, and Charles Rieu. *Catalogus codicum manuscritorum orientalium qui in Museo Britannico asservantur*. Pars 2. Londini: Impensis Curatorum Musei Britannici, 1846-71. 3 vols in 1 vol. Hildesheim: Georg Olms, 1998. [Cureton 1846-71]

Loth, Otto. *A Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Library of the India Office*. London, 1877. [Loth 1877]

Morley, William Hook. *A Descriptive Catalogue of the Historical Manuscripts in the Arabic and Persian Languages, Preserved in the Library of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. London, 1854. [Morley 1854]

史料・史料訳注

『コーラン』藤本勝次ほか訳。全2冊、中央公論新社〈中公クラシックス〉、2002年。

『日亜対訳・注解 聖クルアーン』[三田了一訳]、改訂版、日本ムスリム協会、1982年。

研 究

谷口淳一「中世南インドのムスリム知識人——ザイン・アッディーン・マアバリー著『ポルトガル人の諸情報におけるジハード戦士の贈り物』に関する覚え書き——」森部豊・橋寺知子 編著『アジアにおける文化システムの展開と交流』関西大学出版部、2012年：231-243頁。[谷口2012]

Gabriel, Theodore. *Hindu-Muslim Relations in North Malabar, 1498-1947*. Lewiston et al.: The Edwin Mellen Press, 1996. [Gabriel 1996]

Logan, William. *Malabar Manual*. 2 vols. Madras: The Government Press, 1887. Rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1989. 5th rpt, 2010. [Logan 1887]

